

価値形態論の構造

中 尾 訓 生

はじめに

『資本論』「1章、商品」は四つの節に区分されている。この1章の解釈はすでに多くの人によってなされているが、『資本論』解釈上における重要性からして本稿でもあえて屋上屋の危険をおかすものである。

わが国における『資本論』解釈学のうちに大きな影響をあたえている宇野氏は1章の各節を次のように位置づけている。

「マルクスは資本論の第1巻、第1章、商品の第1節を〈商品の二要因〉として使用価値と価値を論ずるのであるが、その価値については直ちに価値の実体、価値の大きさを解明するのである。それはこれにつづく第2節の〈商品に表わされた労働の二重性〉と相俟ってマルクスの労働価値説をなすわけであるが商品論の冒頭に価値実体を解明しようとする方法は、第3節で展開されるマルクスによって始めて確立された価値形態論にいな第1章を商品論とした彼の方法自身にも相応するものとはいえないのである。商品論はそれにつづく貨幣論、資本論に対応して形態に展開せらるべきものであって価値形態論はまさにその核心をなすものといってよい。ところがこの価値形態論に先んじてなされる価値実体論のために商品論の中心が曖昧になると同時に価値形態論自身もその影響を受けることになり労働価値説の論証もまた決して十分なるものとはいえないことになっているのである」(『経済学方法論』169頁。宇野弘蔵)

氏の解釈の検討はまず僕自身の解釈をだした後にすることにする。氏の各節のみかたはマルクスが意識していた位置づけと相異していることは明白である。

彼はエンゲルスにあてた手紙のなかで「僕の本の最良の点は、……すぐ第

1章で強調されているところの使用価値に表現されるか、交換価値に表現されるか、にしたがっての労働の二面性」(『資本論にかんする手紙』(上) 159頁 国民文庫)と述べている。

そしてまた2節の冒頭でも「商品に含まれている労働の二面的な性質は私をはじめ批判的に証明したのである。この点が跳躍点であってこれをめぐって経済学を理解があるのであるからこの点はここでもっと詳細に吟味しなければならない」(『資本論』第1巻, 54頁, 向坂訳)と述べている。

本稿ではマルクスが重視したこの2節を中心に据えて解釈をする。

『資本論』が成立してから現在まで百年のへだたりを背景にして解釈しその発展をはかろうと試みるときまず彼が重視していた論理基軸を中心に据えて解釈することは彼の論理の歴史的限界,あるいは歴史的射程を確認するうえで有効であるようにおもわれる。

彼が論理を構築するとき,その抽象からこぼれおちた部分を発見することは,換言すると当時の具体的状況が抽象化されずに論理のうちにとりこまれている部分を摘出することは,百年というへだたりを背景にした解釈者の権利であり義務である。

未来を凝視した彼の論理が依然として生命力をもっていることを明らかにすること,すなわち,依然として未来を凝視していることを可能ならしめている論理と当時の具体的状況との関連を整理すること,これが僕の資本論解釈の基本である。

1

1章でマルクスはなにを明らかにしているのか,換言するといかなる対象を措定し,その措定の論理は。

まず,この章の結論に相当する「4節,商品の物神的性格とその秘密」からみていくことにする。3節までの展開をふまえて彼はここで各共同体の比較をおこなっている。

「(中世の社会では) 独立人のかわりにすべての人が非独立的であるのを見出す——農奴と領主, 家臣と封主, 俗人と僧侶という風に。人身的な隷属ということが物質的生産の社会的諸関係にも, その上に築かれている生活部門にも特徴となっている。しかしながら与えられた社会的基礎をなしているのは, まさしく人身的隷属関係であるのであるから労働と生産物とはその実在性とちがった幻想的な態容をとる必要はない。それらのものは奉仕としてまた現物貢納として社会の営為の中にはいる。労働の自然形態とそして商品生産の基礎におけるようにその一般性ではなくその特殊性とがここでは労働の直接に社会的な形態である。使役労働は商品を生産する労働と同じように時間によってははかれる。だが各農奴は彼がその主人の仕事のために支出するのが彼の個人的労働力の一定量であるということを知っている。……彼らの労働における人々の社会的関係はいずれにしても彼ら自身の人的関係として現われ物のすなわち労働生産物の社会的関係に扮装してはいない」(同上, 102頁)

ここで彼は二つの社会的関係を取りあげ, それらの関連について述べている。

(中世の社会的基礎である) 人身的隷属関係と物質的生産の社会的諸関係 (=労働における人々の関係) である。そして前者は後者を規制する関連にあると指摘している。

これは物質的な生産はその動力を外的にあたえられねばならないということである。

それが分析の対象とした社会 (=商品生産社会) では, 「生産者たちは彼らの労働生産物の交換によってはじめて社会的接触にはいる」ことになるから, 彼らの交換行為はある共同性 (=社会性) を形成することになる。

そのうえ, 労働における彼らの社会的関係, すなわち「(かれらの) 私的な労働は一方においては特定の有用労働として一定の社会的欲望を充足させ, そしてこのようにして総労働のすなわち, 社会的分業の自然発生的体制の構成分子であることを証明しなければならない」(同上, 97頁) のであるが, こ

の証明も交換によっておこなわれる。

したがって中世での二つの社会的関係はここでは一つの場（＝流通）で一つのものとして顕現する。

彼は次のような社会についても述べている。「自由な人間の一つの協力体を考えてみよう。人々は共同の生産手段をもって労働し彼らの多くの個人的労働を意識して一つの社会的労働として支出する。ロビンソンの労働の一切の規定がここで繰り返される」（同上，103頁）

彼がいわんとしていることは次の点である。中世の社会とは逆の意味で「労働と生産物とはその実在性とちがった幻想的な態容をとる必要はない」ということである。

ロビンソンとの対比で表現するならば個即類の社会，個々の物質的再生行為もまた即社会的なる行為（生産と消費の一致）として顕現する。

これらはいうまでもなく彼の歴史観であり，商品の物神性とは物の社会的な諸関係（W—G—W）を当然なものとして，自明なものとして，自然なものとしてみているブルジョア経済学の非歴史性にたいする彼のもっとも抽象的な歴史的特徴づけである。

それでは彼はこの歴史的特徴づけをいかに展開しているのだろうか。

1節，2節の検討にはいることにする。

2

マルクスは日常的に感得できる商品交換から，すなわちA商品x量はB商品y量，C商品z量等々と交換されている，だからB商品y量とC商品z量もまた相互に置き換えることのできる交換価値であるということから，次のように述べる。

「第1に同一商品の妥当なる交換価値は一つの同一物を言い表わしている。だが第2に交換価値はそもそもただそれと区別さるべき内在物の表現方式，すなわちその「現象形態」でありうるにすぎない」（同上，48頁）と。

そしてこの共通なものが価値といわれ、人間労働力支出の単なる膠状物であり、抽象的に人間的労働の対象化されたものである。そして価値をつくりだす労働は「同じ人間労働、抽象的に人間的労働」であるとしている。さて「研究の進行とともにわれわれは価値の必然的な表現方式または現象形態としての交換価値に帰ってくるであろうが、この価値はまず第1にこの形態から切りはなされて考察せられるべきものである」(同上, 50頁)と述べている。これは或る共通なものが認識できたということは「まさに社会のある一定の経済的発展の基礎のうえでのみおこなわれることのできた歴史的抽象である」ことを示さんがためである。

彼はアリストテレスはなぜ価値形態の分析に失敗したかと問い、それは人間は等しいという概念が強固な国民的成心となっていなかったからであると答えている。この概念を獲得するためには「商品形態が労働生産物の一般的形態であり、したがってまた商品所有者としての人間相互の関係が支配的な社会的関係であるような社会」(同上, 79頁)からの抽象が必要であることを指摘している。

彼が価値の実体と価値の大いさについて述べているのは労働の無差別性が一般化している背景を語らんがためである。

この背景のもとに「(労働)時間がすべてであって人はもはや何物でもない。人はせいぜい時間の骨組である」とするような一般的観念は成立、確立するのである。リカードの理論はこのような観念のなかで生まれたのである。

或る共通なものの獲得を可能ならしめるのはこのような状況が必要である。さらに彼がリカードの理論(古典派経済学)を克服したのはこれらのこと(観念の発生)を意識していたところにある。価値として概念化したところにある。

「分析の対象とした社会」のもっとも抽象的な特徴づけはこのような観念をまずとらえるところにある。このような視角のもとで2節の極めて平板ともみえる叙述を彼が「これをめぐって経済学の理解がある」と述べて意図したところを解釈することができるだろう。

或る共通なものの獲得（価値の概念化）が歴史的抽象であるというだけの指摘にとどまらず重要なことは価値の概念化それ自体がそれを抽象した対象（商品所有者としての人間相互の関係）を構成していることを示さなければならないということである。このことによってはじめて対象の歴史的特徴づけはなされる。

「商品に表わされた労働の二重性」は「私的労働」と「社会的労働」ではないことに注意する必要がある。それは使用価値を形成する「具体的に有用なる労働」と価値を形成する「抽象的に人間的労働」である。

彼は「有用なる労働」によって人間は目的意識的な労働によって彼らの諸能力を発展させるという人間観を示し、「抽象的に人間的労働」のもとでは彼らの諸能力は歪曲して顕現しているということを示そうとしている。だから商品に表わされた労働の二重性として「前者では労働は如何にしてなされるかということ、何を作るかということが問題であるが、後者では労働のどれだけということ、すなわちその時間的継続ということが問題なのである」（同上、59頁）ということも直接に物質代謝を説明するためでなく人間相互の関係を説明する文脈にある。

『経済学批判』の「A、商品分析のための史的考察」で概略されているように前者は新たに共同性（＝社会性）が形成されるときに観念されたのであり、後者はそれが確立したときに観念されたのである。

さて、この共同性が形成される場は前述したように、また「私的労働」が社会的分業の自然発生的体制の構成分子であることを証明しなければならない場でもある。

「私的労働」と「社会的労働」の概念がこの共同性を措定する3節で論理的位置をあたえられているのは二つの社会的関係が一体化しているが故である。

そして4節で「私的労働」と「社会的労働」の概念でもって私有財産制と分業に基づいた社会の物質的生産の特徴をあげて他の共同体との比較をおこ

なっている。

彼はこれらの概念をどのようにして対象から抽象、獲得したかは述べていない。

このことは「分析の対象とした社会」のもっとも抽象的な歴史的特徴づけがどこにあるかを示しているだろう。また、これらの概念が商品に表わされた労働の二重性の概念とはその発生（対象、及びその概念の獲得）を異にしていることを示している。

次に3節の解釈に入ることにする。

~ 3

共同性（＝商品所有者間の関係）についての説明は彼らが所有している商品の交換を分析することによってなされる。

流通形態 W （亜麻布，20 エレ）— G — W （上衣，1 着）の社会的象形文字の解説である^①。感覚的にとらえることのできる亜麻布 20 エレ＝上衣 1 着を「亜麻布 20 エレは上衣 1 着にあたいする」と分解し解説する。もちろん上衣 1 着は亜麻布 20 エレにあたいする、としてもよい。

これは亜麻布の価値は上衣の使用価値で表現され、他方上衣は亜麻布の価値表現の材料となっているということであるが問題はこれをどのように解釈するかである。

① 貨幣の謎を解くことが価値形態論の課題であるということは、そのとうりであるが、問題はこの謎とはどのようなことを指しているのか、ということである。これがわからなければマルクスの謎解きもまた理解できないであろう。久留間氏のようにこの謎を、「金の使用価値——本来価値の反対物たるもの——がそのまま一般に価値として妥当すること」（『価値形態論と交換過程論』4頁）であるとして良しとするわけにはいかないであろう。なぜなら、価値そのものがまだ明らかにされていないのであるから。「価値」とは抽象的に人間的労働の対象化されたもの、といったところで何も明らかになっていない。

マルクスがとらえた貨幣の謎とは、プルドン主義者やその他の者達が金のすべてを知りつくし、金を自己の管理下においたと思ったとき、恐慌時に誰にもわかるように金の自己主張に逆に、従わざるを得ないという事例の数々である。

① (亜麻布の所有者) 甲は亜麻布 20 エレを「或るもの」で評価し、上衣 1 着にあたいするとしたのである。もちろん次のようにもいえる。(上衣の所有者) 乙は上衣 1 着を「或るもの」で評価し、亜麻布 20 エレにあたいするとしたのであると。

マルクスはこれから、これらが等置されているということは上衣をつくった具体的労働と亜麻布をつくった具体的労働とは、その差別を捨象されて「抽象的に人間的労働」に還元されているとみたのである。

もちろん、甲や乙が「或るもの」の実体は「抽象的に人間的労働の対象化されたもの」であると認識しているというのではない。

むしろ、彼らの日常的関心の相違から彼らにとっては、「或るものの実体」は共通していないであろう。

マルクスが主張していることは彼らの想念にある「或るもの」は、労働の無差別性に照応している一定の観念によって規制されているということである^②。

人間の諸能力を発展させる合目的意識的労働としての「具体的有用労働」が亜麻布が使用価値としての上衣に関係させるものはその使用価値の属性にはないのであるから「人間的な労働一般の実現形態であり、対象化の仕方」として転倒してあたえられている。

この関係(=観念)を形成しておりながらしかもこの関係(=観念)の歴史性を認識するという展開をマルクスはこの労働の二重性にあたえている。

商品交換の拡大と一定の観念の拡大とは照応している。しかも商品交換が社会的物質的再生産の環としての位置を得ると商品交換によって形成された共同性が物質的再生産と一体化するから商品経済社会はいまだかつてない強固な社会となる。

② 「彼らの諸生産物を商品として相互に関連させるためには、人々は彼らの種々なる労働を捨象的すなわち人間的な労働に等置せざるをえない。彼らはこのことを意識してはいないが、しかし彼らは物質的な物を捨象物たる価値に還元することによってこのことを行う」(『資本論』初版長谷部、訳 95 頁)

甲や乙が自由に自己の労働生産物を交換できるということは決して自明なことではない。それを甲や乙が自明なものとして感得するのはそれに照応した社会的観念が存在しているからである。

もちろん、この社会的観念は甲や乙が日常的にとらえられるものとして、かたちあるものとしてあたえられなければならない。

いかにして。

マルクスは次のように説明している。

「亜麻布の価値をなしている労働の特殊な性質を表現するだけでは充分ではない。流動状態にある人間労働、すなわち人間労働は価値を形成するのではあるが価値ではない。それは凝結した状態で、すなわち対象的な形態で価値となる。人間労働の凝結物としての亜麻布価値を表現するためには、それは亜麻布自身とは物的に相違しているが同時に他の商品と共通に亜麻布にも存する「対象性」として表現されなければならぬ」(同上、67頁)

しかし、すぐ続けて述べているように、「課題はすでに解決されている」

② そこで、この「亜麻布にも存する対象性」の獲得については彼はどのように説明しているだろうか。いうまでもなく、それは、(一)、簡単な形態から(二)、拡大された価値形態そして(三)、一般的価値形態と(四)、貨幣形態への移行の説明である。

(一)から(二)への移行の説明は(一)の不充分性を指摘しそこからあたえられている。

すなわち、——A商品 x 量は $B \cdot y$ にあたいする。そしてまた $A \cdot x$ は $C \cdot z$ にあたいする。そしてまた $A \cdot x$ は……、というようにこの表現は商品の数の拡大とともに拡大されるから(二)の、 $A \cdot x = B \cdot y$ 、をあたへている。

$$= C \cdot z$$

⋮

そして(二)形態への移行によって、「亜麻布はその価値形態によって、もはやただ一つの個々の他の商品種と社会関係にあるだけでなく商品世界と社会関係に立っているのである。それは商品としてこの世界の市民なのである」(同

上, 83頁), このように(一)に比べると商品所有者の行為はある関係(社会的觀念に表示されている。)に規制されていることを示してくるのであるが, しかし, (二)ではその等式からわかるように価値表示が極めて不安定である。

すなわち, その表示序列はいつになっても終らない。等価形態からみても個々の商品種に相応して無数の等価形態が存することになっている。形式的には, この(二)の不充分性は等式を逆にするにより, Aでもって他の一切の商品の価値を表現することによって克服することができる。

しかし, (一)から(二)への移行は, (二)から(三)への移行とは質的に相違している^③。

(二)の不充分性の意味は次のことにある。

商品はすべて一様に質的に等しいものとされているが関係(=社会的觀念)が具体的にかたちあるものとして対象化されていないから感覺的な商品所有者は商品の生まれつきの平等主義的な心を解することができない。(同上, 112頁)

だから商品所有者はおたがいの意志を解することができず交換をおこなうことができない。それでは商品所有者はいかにして商品の心を解したか。

マルクスの答えは, 「初めに行いありき」である。すなわち, 「商品性質の諸法則は商品所有者の自然本能の中に活動していた」(同上, 114頁)ということである。

③ 私有財産制と分業に基づく社会では個々ばらばらにおこなわれる物質的生産は商品(彼らの労働生産物)交換によってはじめて社会的調整を受ける。すなわち生産者たちは商品の交換によってはじめて社会的接触に入り, 彼らの私的な労働が社会的総労働の構成分子であったかどうかは流通によって実証される。

マルクスは価値形態論の展開でこの点の説明をしている。すでにみたように亜麻布の価値は上衣の使用価値で表現されるということは上衣は社会的觀念の対象化されたもの, 「純粹に社会的なるものを代表している」のであった。

③『価値形態論と交換過程論』(久留間鮫造)の「移行」についての説明を参照。

例えば、上衣は商品教の教皇であり、他の商品は信者という関係である。

等価形態の第3の特性としてマルクスは上衣にふくまれている労働は「他の一切の商品生産労働と同じように私的労働ではあるが、しかし直接に社会的な形態における労働である」(同上, 77頁)と述べている。上衣は他の一切の商品にたいして直接に交換可能なのである。上衣は暴力的にこれをなすのではない。他の商品が上衣と関係をもとうとするのである。

以上、①、②、③、から等価形態にある商品(歴史的には金がその地位を占有している)は、資本制以前の社会における二つの社会的関係を一身に体化しているものと解釈できるだろう^④したがって、前述したように、『資本論』が成立した状況から百年のへだたりを有する解釈者には二つの社会関係を構成している概念が発生を異にしているのであるから金に体化している二つの社会関係にズレが生じていないかどうかを探求することが課せられている。

4

宇野氏はマルクスが1節、2節で「価値の実体、大いさ」を説いたことによって価値形態論の核心があいまいになったと解される。

価値形態論は氏によるとブルジョア的生産様式を歴史的に特徴づけるものであるが、氏によると1節、2節で「価値の実体、大いさ」を説いたことによって、「形態論の歴史的観点を古典経済学の欠陥の中に埋没せしめる危険」をもつことになったというのである。

氏によるとマルクスの労働価値説は量的規定のためにのみあたえられてい

④ 社会的物質代謝を簡明にとらえているケネーの「経済表」とマルクスの「再生産表式」の比較によって「二つの社会的関係」をみてみよう。

マルクスの表式では貨幣は出発点に還流することによって再生産は連続的であるが、すなわち、再生産過程の内部にその動力が備わっているのであるが、ケネーの経済表では、貨幣は出発点に還流しない。したがって、経済表が連続的であるためには生産階級から貨幣は、地主・主権者に移転しなければならない。これは、「移転」を可能ならしめる社会的関係が物質代謝の関係と一体化していないことを示している。

るようである。氏の『資本論』「1章」の解釈をみるとマルクスに異論をたてている点は彼の量的規定が論理的に不純であるというところである。

氏によると商品形態は、あらゆる歴史的な社会生活に共通する人間の物質的生活資料の生産、再生産の過程としての経済生活一般としての経済原則を基礎にしていけないので、この形態を説いている1節、2節では労働価値説は説かれるべきではないとされている。

すなわち、「商品形態自身は生産にたいして外的にあたえられたものにすぎない……」(『価値論』49頁)

ブルジョア的生産様式の歴史的特徴づけは氏の場合、経済原則が実現される特有の仕方に求められる。この原則は資本形態のもとで実現のメカニズムをあたえられるのであるから労働価値説はその形態のもとで説かれるべきというのである。

マルクスが1節、2節で労働価値説を説くことを氏が避けられる論拠から氏の商品形態論は歴史的な叙述であると解されるのであるが^⑤、そうであるとする、氏の説明は極めて不十分であることは明白である。しかし氏自身が歴史的な叙述であることは否定しておられる^⑥。

しかし、歴史的叙述であることの否定の論拠は氏の商品形態論に内在しているものではない。むしろ、その論拠は労働価値説を説かないことからその価値形態論に生じる論理的不充分性を補うためにあたえられているようにおもえる^⑦。

⑤ 氏はマルクスの労働価値説をまったく量的規定のためにあたえられていると解し、「生産関係の異なる諸社会の間におこなわれる商品交換、あるいは生産事情の異なる諸地域の商品交換にここであげられているような《社会的に正常な生産諸条件と労働の熟練および強度の社会的平均度と》を求めるわけにはゆかない」(『経済学方法論』176頁)と述べているのであるが、ここで氏があたえている商品交換は価値形態論の展開とどう結びついているのであろうか。

⑥ 「商品経済の理論としての経済学の分析においては、いかに抽象的な商品を扱うにしても、それはすでに資本主義社会のごとく全面的に商品交換の行われていることを前提としているものであって、これをいわゆる単純な商品として具体的に歴史的に資本主義以前の商品となすことはできないのである」(『価値論』27頁)

労働価値説を説かないところから積極的にでてくる氏の論点は価値尺度論にあらわれるが、その検討は別稿にゆずるとして、ここではまず氏の価値形態論に若干の疑問点をだしてみたい。

氏は、「商品は単なる財貨と異って物をその物的性質に関係なく一様な質を有するものとする。商品の価値は先ずかかるものとして現われるのである」(『経済原論』上、24頁)と簡単に述べられるのであるが、日常的感覚において人は価格表から氏の述べられているようなことを思い浮べるであろうか。

氏は「商品としての机と紙とは価値としては同じ質のものとして互に比較計量せられるが、使用価値としては各々異ったものであって通約するわけにはゆかない」(同上、25頁)と述べておられる。

机と紙とが交換されるとき、その所有者は相手方の商品に高い効用を認めて交換するということは交換当事者に即してみると納得的であるようにおも

う。「同じ質」を氏はこの効用と解しておられるのだろうか。氏は上に引用した文に註を付してそれを否定されている。すなわち、「いわゆる効用学説は使用価値としても通約されるものとしているが、それは個人的な心理的通約であって社会的には通用しない」(同上、25頁)と。

⑦ 氏は理論のはじめにとりあげられている商品は貨幣の必然性を展開できる商品でなければならない(『価値論』19頁)と述べているが、氏が抽象した商品はそのようなものとしてあたえられているであろうか。氏は『資本論』1章にみられる商品は資本主義社会の商品交換から抽象されたものであることを、幾度も強調されておられるが、それが氏の価値形態論の展開にどのように作用しているかは説明されていない。いいかえると、価値形態論の展開それ自体のなかからはその抽象性をみることができない。

氏は「資本家的関係を捨象した……抽象的な商品はいかなる性質を有するかということを考えておかなければならない」(『価値論』31頁)としてその性質について述べられているが、例えば次のように外面的な主張をされているだけである。

「それは、いわゆる単純なる商品のごとき具体性を有するものではない。」

「歴史的には依然として資本家的生産関係に規定せられた商品であってたんにその資本家的関係から抽象され、あるいはまた進んで貨幣形態自身から抽象されたものにすぎない。」

しかし、それならば氏の展開にあって、「一様な質を有する」として把握したのは誰であるのだろうか。いうまでもなく、氏自身が抽象力を働かせて把握したのだろうか^⑧。

ただこのことを氏は明確にされていない。

机と紙が等置（机＝紙）されるということはその等置を成立せしめる何かを認めなくては不可能だろう。その何かは交換当事者の「効用」であることは否定されている。

氏の価値形態論の主題はリンネルでもない、茶でもない、あるものへの還元がいかにおこなわれてゆくかをみるところにある。（『価値論』144頁）氏は、簡単な価値形態、「リンネル10ヤールは上衣1着にあたいする」という表現は(一)、「リンネルを商品として所有する者が自分の欲する5封度の茶に対してならばリンネル、10ヤールを交換してもよいという関係を表示しているのであって、厳密に言えば茶はなおリンネルと交換に提供せられていなくてもよいわけである」（『原論』上、30頁）と解釈される。

しかし、また(二)、「この形態でリンネルはその使用価値を全く異にする茶をもってその価値を表現される」（同上、28頁）とも述べられている。そこで一応次のようにいえるだろう。

(1)、氏の論理には「価値」概念はまだ獲得されていないので価値形態論の展開には「価値」概念は使用できないであろう。

(2)、実際、氏の展開は(一)が基軸なのであって(二)は論理的位置が不明確であ

⑧「商品はまずなによりも第一に価値であり、すべて質的には一様で単にその量を異にするものにすぎないということは、われわれが商品の価値がいかなる内容規定を有するものであるか、その質はいかなる性質を有するものであるか、その量が異なるとはいかにして生ずるか、これらいっさいのことにかんしてはなお全然知ることのないものとしても、日常の経験からいっても当然のこととして認められるところといえるであろう」（『価値論』35頁）タバコ1箱100円、鉛筆2本100円、時計1個1000円等々の価格表から人は日常の経験からして当然のこととして、タバコ＝鉛筆＝時計＝……、を認識できるであろうか。等置であるということを知ること、等置を可能ならしめる根拠を人はもっていなければならないであろう。各人が共通の根拠をもっているかどうかは別として。

る。

そこで(一)の視点からみていくことにするが以下の疑問が生ずる。

(一)の解釈で氏が意図されていることは、商品所有者の交渉が幾度もおこなわれることによって、或るものへの還元が指示されるというところにある。しかしながら、商品所有者の個人的、心理的通約から氏のいう社会的通約は商品所有者の行動に視点を据えているかぎり、はたされないのではないだろうか。

リンネル所有者の欲する商品の増加するにしたがって表現は拡大される。

さて氏は、どのようにして一般的価値形態に移行するのであろうか、どのようにして社会的通約をはたすのであろうか。

「商品の所有者は元来いずれも自己の商品の使用価値が等価形態にある商品の所有者の欲するところか否かに関係なくその商品の価値を相手の商品の使用価値として実現しようとするものである。しかも自らこれを実現し得るものではない。また相手の商品所有者も同様に自己の商品を自己の欲する使用価値に対してのみ譲渡せんとするものであって、商品の価値と使用価値との対立は、その商品範囲の拡大するにしたがって益々困難とならざるを得ない」(同上、34頁)と述べている。

氏の積極的論点にしたがうならば、「商品の価値と使用価値との対立」、は次のように改められるべきであろう。

リンネルの所有者は茶を欲するが、茶の所有者は鉄を欲する、鉄の所有者は、……と。

だから、この困難を解決する途も、氏は述べられていないが、結局は商品所有者達が交渉して解決しなければならないであろう。

なぜなら氏の価値形態論の展開は商品所有者の私的関心事によってすすめられているのであるから。

「価値」概念の獲得を明確にしないことの、もう一つの論点。

氏は、マルクスが引用し、解釈したアリストテレスをひきあいにしてマルクスとの相違を明白ならしめている。

すなわち、マルクスは自己の論理（1節，2節で価値の実体と大いさを説いている叙述）からアリストテレスは価値の実体を誤って把握したから価値形態論の核心をつかむことができなかつたと解した。

氏はアリストテレスが価値の実体を説くことなくして価値の形態を説いているとして評価し，この点を「価値の形態はその実体を明らかにしうるに先だつて解明しうる」（『経済学方法論』190頁）ことの一つの論拠とされている。

氏はリンネル100円，机500円，紙300円等々の価格表から実体を把握することなくしてリンネル＝机＝紙＝……，を抽象できるとアリストテレスを例にして主張されるが，——アリストテレスの例は別にしても——はたして可能であろうか。

アリストテレスは幾足の靴＝1軒の家，がいえるためには，これらの物品は或る一つのものに還元されなければならないと述べているのであって氏の論拠とすることはできないのではないか。

アリストテレスはこの「或るもの」を「需要」（＝効用）としたのである。

マルクスがアリストテレスを評価したのは交易的な性質の共同関係が生ずるためには，なにが必要とされるべきかを探求していたからである^⑨。

アリストテレスはこの「或るもの」を個人的な関係としての「需要」としたのであるが，それ故に彼は貨幣を契約に基づくものとしてとらえたのである。アリストテレスの偉大なところである。なぜならば，ギリシャ社会には交易に基づく共同関係が形成されないことを示したから。そしてマルクスの眼からみれば彼は何故，それが形成されないかも示していたのである。

⑨ 交易に基づく「共同関係の生ずるのは二人の医者の間においてではなくして医者と農夫との間においてであり，総じて異なったひとびとの間においてであつて，均等なひとびとの間においてではない。かえつてこれらのひとびとは均等化されることを要するのである。交易されるべき事物がすべて何らかの仕方で比較可能的たることを要する所以はそこにある」

「交易なくしては共同関係はないのであるが，交易は均等性なしには存在せず，均等性は通約性なしには存在しない。もとより，かくも著しい差異のあるいろいろのものが通約的となるということは，ほんとは不可能なのであるが需要ということへの関係から十分に可能となる」（『ニコマコス倫理学』109頁，110頁，高田訳，河出書房）